



### 第3回

## 中国仏教と肉食にくじき

柳 幹康

中国仏教ではインド仏教の流れをうけ、当初は許容していた肉食を後に全面的に禁止します。今回はその経緯について紹介いたします。

中国において肉は古代より美味なご馳走でした。「美」という漢字の上下は「羊」と「大」から成り、全体として肥え太った大きな羊の肉の甘さを表すとされます（『説文解字』）。古の聖王の禹は人々に肉を食べるよう勧めたとされ（『尚書』「益稷」）、文献には「肉を食べるのは貴族である」との説や（『春秋経伝集解』「莊公十年」）、七十以上の老いた庶民でも肉が食べられるのが良い政治であるというものがあります（『孟子』「尽心章句上」）。

その後、一世紀頃に仏教が中国に伝わり、五世紀初めには出家者の規範を示した律が漢語に訳されました。そこでは前回見た通り、一部の

例外（人肉など特定の肉、および三種浄肉の条件から外れるもの）を除き、布施された肉を出家者が口にすることが公認されていました。そのため中国の僧侶も当初、一部の例外を除き肉を食べることに特段疑念を抱いておりませんでした。

ところが程なく中国では肉食が全面禁止されます。五世紀後半に中国で編まれた『梵網経』は肉食を一切禁止するとともに、放生（食用に捉えられた生き物を解き放つてやること）を強く勧めており、後に中国では数多くの放生池（放生用の池）が設けられました。また六世紀に南方の梁を治めていた篤信家の武帝（在位五〇二―五四九）は国内の僧尼に対して肉食の全面禁止を課し、それを破った場合には法律により処罰すると通達しました。その約五十年後に

は北方の北周でも同様に肉食の全面禁止がなされていきます。

武帝が肉食を全面禁止した際、僧侶はそれに反撥しました。なぜなら、釈尊の制定と伝えられるインド由来の律において、肉食は基本的に認されていたからです。そのような僧侶に対し武帝が持ち出した自説の論拠が、肉食の全面禁止を説く『涅槃經』でした。そのなかで釈尊は、弟子の摩訶迦葉の問い「どうしてこれまで肉食を認めていたのか」に対し、「最初から肉食を全て禁じてしまうと、中には耐えきれず死んでしまう者もいる。そこで先には条件つきで認めたが、今や機が熟したので全面的に禁ずるのだ」と答えています（巻四）。



梁武帝

（『歴代君臣図像』巻上、部分、  
国立国会図書館ウェブサイト）

た仏典ですが、中国の人々はそれを釈尊の入滅時の教えと信じていました。武帝も勿論、それを入滅時、すなわち釈尊が最期に臨んで示した最高の教えと理解し、その遵守を出家者に求めたのです。

なお中国撰述『梵網經』の肉食・放生に関する説は、インド撰述の『涅槃經』（巻四）と『央掘摩羅經』（巻四）に依っています。すなわち、肉食禁止の理由は『涅槃經』から(1)慈悲の種子を断じること、(2)生き物を恐れさせることを、放生推奨の理由は『央掘摩羅經』から(3)永遠の輪廻のなかで生き物がみな親子の関係を結んでいること、および(4)他者を食らうのは我が身を食らうような僻事であることを承けています。うち(4)については『央掘摩羅經』と『梵網經』で説き方に若干の相違があり、それぞれ「次々と役を変える役者の如く一切は変化し続けており、自分の肉も他人の肉も同じである」、「（現在の他者の肉体を構成している）諸元素は皆、かつて過去生の我が身を形作っていたのだから、他者を食

うのは元の自分を殺すようなものだ」と述べています。恐らく『梵網経』はより分かりやすいよう文を改めたのでしよう。

中国において肉食の全面禁止は七世紀頃には定着したと思しく、十世紀以降、仏教徒が肉食しないのは至極当然のことと見なされるようになりました。また遅くとも十三世紀には、素食者対応の飲食店が出現し、植物由来のグルテン等を用いた模倣肉なども食されるようになりました。ちなみに中国で肉食の全面禁止が定着した背景としては、肉のみならず五穀まで断つことで仙人になるという道教の実践や、仁として殺生を厭う儒教の考えなどが指摘されています。

とはいえ、なかには肉の味が忘れられず、それを密かに食べる僧侶もいたようです。彼らが用いていた二種の隠語「水梭花」「鑽籬菜」が、北宋の蘇軾（一〇三六—一一〇一）により書き留められています（『東坡志林』卷二「道釈・僧文董食名」）。水のなかを梭（縦糸の間を左右に行き来して横糸を通す機織りの道具）のように往

来する花、籬を鑽ち穴を開ける菜っぱ——何を指すか分かるでしょうか。その答えは、魚と鶏です。なかなか機知に富んだ表現だと思いが、蘇軾がそれを厳しく批判していることは言うまでもありません。

なかには隠語を用いて窃かに食べる者もいたようですが、インド仏教では条件つきで許容されていた肉食は、中国において全面的に禁止されることとなり、出家者はもとより篤信の在家者も今日に至るまでそれを忌避するようになったのでした。

【主な参考文献】 Kieschnick, J. "Buddhist Vegetarianism in China." *Of Tripod and Palate: Food, Politics, and Religion in Traditional China*, Palgrave Macmillan, 2005. 諏訪義純『中国中世仏教史研究』大東出版社、一九八八年。船山徹『東アジア仏教の生活規則 梵網経——最古の形と発展の歴史』臨川書店、二〇一七年。道端良秀『中国仏教史全集』三、書苑、一九八五年。

柳幹康（やなぎ みきやす）

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。現在東京大学東洋文化研究所准教授、花園大学国際禅学研究所副所長。

# お願い

## 花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

\*ㄨ切りは毎月1日です。

## 『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8034 京都市右京区花園木辻北町1  
妙心寺派宗務本所内編集室  
俳壇／歌壇／花園 係

\*住所、氏名を必ずお書きください。

\*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

\*なお投稿はお返しいたしません。

**花園**  
hanazono

「いつもココロに花園を」  
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第73巻 第6号(通巻第862号)  
令和5年6月1日発行(毎月1日発行)  
定価60円

【発行人】野口善敬

【編集人】石田信行

【印刷人】古崎良一

【発行所】京都市右京区花園木辻北町1  
妙心寺派宗務本所 教化センター  
振替／01060-9-1400  
電話／075-463-3121

表紙の絵

たんらん  
「団欒」



豊かな雨を振り所に、  
話に花を咲かせます。

絵・元場 葵(もとば あおい)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,620円(税・送料込)です。  
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

\*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。